
はじめに 本書の特色・構成・データと出典

本書の特色は3つある。

第1に、シベリアの少数民族言語であるサハ語の体系的文法記述を行っていることである。サハ語は、ユーラシア大陸の東西に分布する約30ほどのチュルク諸語のうち、最も北東端で話される言語である。チュルク諸語の言語構造は、互いに良く似ているとされる。たしかに、サハ語の複数接辞・所有接辞・格接辞などの文法形式や文の作り方は、他のチュルク諸語と極めて類似する。しかしながらサハ語文法を仔細に眺めると、表面的な類似以上に、文法形式の義務性などにおける大きな違いも見えてくる。チュルク諸語の文法書はいくつか出版されているが、研究書はごくわずかしかない。その意味で本書は、単にサハ語文法記述に留まらない価値も持っている。

第2に、サハ語における見かけ上は複雑な現象における規則性を解きほぐしている点がある。サハ語は、形態音韻交替が豊かな点に1つの特色がある。主として母音調和と頭子音交替規則が働くことにより、大半の接尾辞は16種前後の異形態を持つ。接辞付加の際には、接辞だけではなく語幹にも交替が生じる場合がある。しかも複数の交替規則が同時に働くことがあるため、形態音韻交替は極めて複雑に見える。本書で提案する交替規則の整理と語幹の分類は、一見すると複雑な形態音韻交替を規則的・統一的に説明しようとするものである。文法面でも、目的語に3種類の格(主格・対格・格)が現れる。本書では、形式的要因と語用論的要因を整理し規則の優先順位を定めることで、3つの格の使い分けルールを分かりやすく捉えることを試みる。

第3に、サハ語の形態法上の大きな特徴である派生形態法の記述が挙げられる。サハ語の派生形態法では、語彙的緊密性に反する派生を生産的に行うことが可能である。派生形態法のこの性質は、伝統的な記述文法の立場からも理論言語学的な立場からも特異である。本書ではこのような派生を統語的派生と呼び、サハ語では統語的關係を内包する派生が可能であると主張する。統語的派生は、非人称受動文や二重対格使役文のような言語類型論的に非典型的な構文を生むことにもなる。

本書は全10章から構成されている。

第1章から第5章では、サハ語の音韻・形態・統語の概要を示しながら、サハ語の特徴を筆者なりの文法観により整理する。第1章では、サハ語の概要を示す。第2章では、形態音韻交替について記述する。第3章では、名詞類(名詞・形容詞・副詞・数詞の総称)の形態統語法の概要を示す。第4章では、動詞の形態統語法の概要を示す。第5章では、主節述語に付加する接辞と文末接語について記述する。

第6章では、派生形態法を記述する。筆者はサハ語の派生を、語彙的派生と統語的派生に分類する。語彙的派生は単に新たな語幹を作る働きしか無いが、統語的派生では屈折接辞を含む派生や統語関係(修飾・支配・全部否定など)を内包するダイナミックな派生が可能である。統語的派生は部分的に屈折に近い特徴も示す。また統語的派生の類型的特異性は、文法範疇の部分的保持として解釈可能である。

第7章では、名詞類の分類の問題を取り上げる。従来の品詞分類における名詞・形容詞・副詞は、必ずしもそれらの統語機能を反映したものではなかった。これに対し本書では、主として形態法上の共通点からこれらを名詞類として大きくまとめ、さらにそれらを統語機能から8つの小さなグループに分けることを提案している。この8つのグループへの分類は、単純語(非派生語)だけでなく派生語や句・節の統語機能にも適用可能であるため、サハ語名詞類の記述に有益なも

のである。

第8章では、ボイス接辞とボイス接辞を含む構文について記述する。特にボイス接辞を含む統語的派生に関して新たな主張を行う。本章ではまず、サハ語の使役接辞・受身接辞には、対格目的語を保持したままの派生を許すという特徴があることを示す。このことの1つの結果として、サハ語では二重対格使役文および非人称受動文が可能である。本章では次に、同音形式の再帰接辞と逆使役接辞を別形態系として捉え、前者は統語的派生接辞であるが後者は語彙的派生接辞であるとする。音韻的・形態的・統語的根拠からも、両接辞は別々の形態素として考える根拠がある。

第9章では、目的語の格選択の問題を取り上げる。サハ語では、対格名詞・分格名詞・はだか名詞形(見かけ上は主格)という3種の形式が目的語として現れる。これらのうち対格標示を、サハ語の目的語としてデフォルトの標示形式だと見なせる。この点を踏まえて本章では、分格標示およびはだか名詞形がどのような要因の関与により選択されているのかを明らかにする。さらに本章では、サハ語の分格の成立に対して系統的・地理的観点からの考察を行う。

第10章では、前章まで述べてきたことに基づき、言語類型論的な観点および系統的・地理的な観点から見てサハ語がどのような特質を有するのかを示すことで、本書のまとめとする。

本書で用いるサハ語のデータは、主として母語話者へのインタビュー調査および新聞コーパスからのものである。先行研究からの例を引用する場合にのみ、出典を示すことにする。

筆者自身のインタビュー調査による例は、2000年以降現在に至るまで、ロシア連邦サハ共和国における現地調査または日本国内における補充調査により得られたものである¹⁾。

新聞コーパスは、サハ語週刊新聞 *Эдэр саас* 紙(1999年7月～2001年6月)および *Кылым* 紙(2006年11月～2009年8月)の電子版を基に筆者が作成した約160万

語から成る資料である。

サハ語以外の言語からの例文を示す際には、例文番号を含む行の上に [Tyvan] のように言語名を英語で示すことにする。

注

- 1) ロシアでの現地調査は、三菱信託山室記念奨学財団助成金、東京大学学術研究奨励資金、新潟大学プロジェクト推進経費、科学研究費の支援を受けている。本書に関わる研究のためこれまでに受けた科学研究費は以下の通りである：2002年度～2004年度・基盤研究A(課題番号14251019, 研究代表者：林徹), 2006年度～2008年度・基盤研究A(課題番号18251007, 研究代表者：久保智之), 2009年度～2011年度・基盤研究A(課題番号21251006, 研究代表者：久保智之), 2010年度～2012年度・特別研究員奨励費(課題番号22・10287, 研究代表者：江畑冬生), 2013年度・研究活動スタート支援(課題番号25884027, 研究代表者：江畑冬生), 2014年度～2016年度・若手研究A(課題番号26704004, 研究代表者：江畑冬生), 2015年度～2018年度・基盤研究B(課題番号15H05155, 研究代表者：呉人徳司), 2017年度～2020年度・若手研究A(課題番号17H04773, 研究代表者：江畑冬生), 2018年度～2020年度・基盤研究A(課題番号18H03578, 研究代表者：久保智之), 2018年度～2021年度・基盤研究B(課題番号18H00665, 研究代表者：呉人恵)。

目次

はじめに 本書の特色・構成・データと出典	i
図表一覧	ix
略号一覧	x
第1章 サハ語の概要	001
1.1. 現在の言語状況と系統	001
1.2. 音韻の概要	003
1.3. 母音調和	005
1.4. アクセント	006
1.5. 品詞分類の概要	006
1.6. 形態法の概要	006
1.7. 統語法の概要	008
コラム1: [k]と[x]は同一音素の異音であるか	010
第2章 形態音韻交替	011
2.1. 交替の生じる場所と要因の整理	011
2.2. 音韻的要因による接辞の交替	012
2.3. 音韻的要因による語幹の交替	017
2.4. 形態的要因による接辞の交替	020
2.5. 形態的要因による語幹の交替	024
2.6. 接辞に生じる不規則交替	027
2.7. 語幹に生じる不規則交替	028

2.8.	語幹の分類と母音脱落語幹	029
2.9.	トゥバ語における交替との対照	036
2.10.	本章のまとめ	037
	コラム2: <i>bultaa</i> 「狩る」は <i>bult</i> + <i>-aa</i> と分析可能か	040
第3章	名詞類の形態統語法の概要	041
3.1.	名詞形態法の概要	041
3.2.	名詞語幹に付加する屈折接辞	042
3.3.	名詞語幹に付加する派生接辞	046
3.4.	数詞語幹に付加する接尾辞	051
3.5.	名詞統語法の概要	056
3.6.	本章のまとめ	066
	コラム3: 複数接辞と3人称複数所有接辞の連続	069
第4章	動詞の形態統語法の概要	071
4.1.	動詞形態法の概要	071
4.2.	動詞語幹に付加する屈折接辞	072
4.3.	動詞語幹に付加する派生接辞	077
4.4.	動詞統語法の概要	082
4.5.	本章のまとめ	085
	コラム4: 再帰代名詞 <i>beje</i> 「自身」および全部代名詞 <i>bari</i> 「皆」を含む 句における1・2人称所有接辞の振る舞い	089
第5章	主節述語に付加する接辞と文末接語	091
5.1.	主節述語の構造の概要	091
5.2.	文の種類を表す屈折接辞	092
5.3.	対事的モダリティの文末接語	094
5.4.	対人的モダリティの文末接語	096
5.5.	文末接語の分類と形態統語的振る舞いの相関	101

5.6. 本章のまとめ	106
コラム5：所有接辞の非句末形は属格の痕跡と言えるか	107
第6章 語彙的派生と統語的派生	109
6.1. 統語的派生の類型論的特異性	109
6.2. 名詞類から名詞類への派生	110
6.3. 名詞類から動詞への派生	112
6.4. 動詞から名詞類への派生	113
6.5. 動詞から動詞への派生	115
6.6. 語彙的派生・統語的派生・屈折の連続性	116
6.7. 統語的派生の解釈と位置づけ	122
6.8. 本章のまとめ	128
コラム6：サハ語文法に「双数」の文法概念は必要であるか	130
第7章 名詞類の分類と統語機能	133
7.1. 従来の名詞類分類における問題点	133
7.2. 名詞語幹の名詞句機能・連体修飾機能・副詞句機能	135
7.3. 統語機能から見た単純語の分類	139
7.4. 統語機能から見た派生語の分類	147
7.5. 句および節の統語機能	154
7.6. 接辞付加による統語機能の単一化	162
7.7. 本章のまとめ	168
コラム7：propriativeの接尾辞-leexの多機能性	171
第8章 ボイス接辞による派生と非典型的構文	175
8.1. サハ語のボイスの概略	175
8.2. 使役文：二重対格使役を中心に	176
8.3. 受動文：非人称受動を中心に	184
8.4. 再帰接辞と逆使役接辞の区別	189

8.5. 本章のまとめ	197
コラム8: 母音語幹動詞と子音語幹動詞	199
第9章 目的語の形式選択に関わる要因	201
9.1. 目的語として現れる3種の形式	201
9.2. デフォルトとしての対格標示	203
9.3. 分格標示の成立条件	204
9.4. はだか名詞形目的語の成立条件	210
9.5. 系統的・地理的に見た分格	214
9.6. 本章のまとめ	221
コラム9: 名詞語幹の単数主格形とはだか名詞形の違い	224
第10章 サハ語の特質	229
10.1. 形態音韻交替の規則性と全面性	229
10.2. 名詞類の分類と統語機能	229
10.3. 名詞類の形態統語法と動詞の形態統語法	230
10.4. 統語的派生と語彙的緊密性	231
10.5. 系統的・地理的に見たサハ語	232
参考文献	234
あとがき	239
附録 主な屈折接辞と活用表	241
用語・言語名索引	246